



広域科学専攻長 菅原 正

## 型から入りて型から出る

早いもので、昨年フロンティエールに専攻長の挨拶を書いてから、もう1年経ってしまった。この原稿を締め切りに追われつつ書くのは、新年の行事も終わり、東京といえども霜柱が立ち、氷が路面を覆う頃となる。それでもまだ、浅草や築地のあたりは、正月らしい賑わいが漂っている。初春の芝居を観に行く時間があるかなあと思っていたら、昔、まだ、ラジオを聞く機会が多かった頃、話し上手な歌舞伎界の名優がラジオの対談で語っていた言葉を思い出した。「昔、古老に、『芝居の型って何ですか？』って聞いたら、その古老は『型は心だよ。』って教えてくれたんですよ。」昔の名人のその言葉は、おそらく、喜び、怒り、嘆きの心を一瞬に凝縮した身体表現が型なのだけれど、それを弟子がなぞり、またその弟子に伝えているうちに形骸化し、型どおり演じていても、初代が演じたときの感動が抜け落ちていくのを戒めたのであろう。

また曰く、「私たちの頃はね、『型から入って型から出なきゃダメだぞ』ってしょっちゅう言われたものですよ。」思うに、まず大切なのは、名人上手の型通りに演じられるようになることで、これすらできない者が大半である。中には芸達者で、先代そっくり、先代生き写しと言われる役者も出てくるけど、その後伸び悩んだ末、ある時、ふっと肩の力が抜けた演技が出来るようになって、見巧者から、『おっ、旨くなったねー』と声を掛けられたとき、型という枠を通して心が表現できたといえるのだろう。

研究の世界もまた然り。今更ながら奥の深いものだと痛感する。本年度の専攻教員各位の研究・教育の成果の一端が、このフロンティエールに記されているので、是非、目を通していただきたい。「相ともに 流しおおたる 汗涙」秀山（初代吉衛門の俳号）

ところで、広域科学専攻のこの一年を振り返ってみよう。最大の懸案は、世に「理系離れ」と言われている中で、本専攻を構成する生命環境科学系、広域システム科学系、相関基礎科学系と密接に関連する後期課程の3学科、生命・認知科学科、広域科学科、基礎科学科をどのように改変し、これからの日本を背負う若者にとって魅力的なものにするかであった。後期課程とは、これまで数多の天才達が科学の世界で築き上げてきた学問体系を、講義を通じ追体験している学生達に、やがて科学の舞台で活躍するであろう研究者の卵としての自覚を持たせるところ（道場）である。

ここでは、何が問題なのか。「型の話」の続きで言えば、型の大事さのみ若者に口うるさく言っている、やがて時代から取り残される。現代の若者に、科学の「こころ」を伝えることだろう。「科学する」とは、人知では計り知れない自然現象を解明し、さらにはそれを人間生活の質を向上させることに役立てることである。今風に言えば、大学で科学の考え方、方法論を身につけ、世で揉まれつつ、科学を通して真に社会——この社会がそれを取り巻く環境の中にあることを忘れてはならない——に貢献すること、といえるであろうか。そこには『型から入りて型から出る』の精神が息づいていなければならない。駒場キャンパスが理念として掲げる学際教育とは、自分の専門とする分野を深める一方、必要とあらば、他の分野の方法論をも積極的に取り入れることで、解決すべき課題の本質に迫るスタイルを学ぶことであり、「型からの出かた」をほんの少しでも学ぶことに他ならない。後期課程の改革は、大変ではあるが、やりがいのある仕事であり、教員が情熱を傾けて科学の重要性を若者に向けて発信すれば、必ずや実りある成果が得られるであろう。万一、機を逃せば取り返しのつかないことになりかねない。

本年度専攻の事業として、広域科学専攻、および後期課程3学科を紹介する本「駒場の理系がすごい」を上梓した。出版が無事終わった今振り返ってみると、本を出すことで一番勉強できたのは、むしろ専攻の構成員で、この本を手にして「これが我が専攻だ」と言えるようになった気がする。この稿を読まれた方は、書店で是非一度、手にとってみたい。特に、若い読者が、この本を通じ、本専攻および後期課程3学科の魅力を実感してくれることを願っている。